平成２３年度 国立大洲青少年交流の家教育事業

青少年教育施設プログラムを活用した小学校長期自然体験活動

カヌーと理科の学習を結び付けることで、河原や川岸の石を手にとって観察したり、流れの速さや水量を肌で感じたりすることができました。テント泊や羽釜を使った飯ごう炊飯、大洲城までのカヌーツーリングなど、学校では体験できない交流の家ならではの活動を通して、「生きる力」を育みました。

１　事業実施までの経緯

学校を離れて行う「集団宿泊活動」は、通常の学校生活では実施することのできない自然体験や交流体験など、様々な体験活動の実践が可能である。「小学校学習指導要領解説特別活動編」では、「望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間（例えば１週間〔５日間〕程度）にわたって行うことが望まれる。」と長期の集団宿泊活動の推進を提示している。

それを受けて、国立大洲青少年交流の家では、青少年教育施設プログラムを活用し、学習指導要領、地域資源の活用等と関連付けながら、３泊４日の小学校長期自然体験活動プログラムを企画・立案した。昨年度より当施設を利用している小学校団体を調査し、学校規模や利用時期、活動のねらい等が合致している伊予市「中山連合小学校」にモデル校を依頼した。

今年度に入り、学校を訪問しての事前打合せやメール・電話での連絡、諸団体との調整等を重ねながら、実施に向けての準備を計画的に進めていった。

２　ね ら い

関係諸機関と連携して青少年教育施設プログラムの教材化を進め、モデルプログラムを試行することで問題点を検討し、長期自然体験活動の普及と推進を図る。

３　主　　催　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家

４　期　　日　平成２３年１０月１１日（火）～１４日（金）　【３泊４日】
平成２４年１月２０日（金）　小学校自然体験活動普及・推進検討会議

５　場　　所　国立大洲青少年交流の家　肱川カヌー場　他

６　参加人数　伊予市中山連合小学校　中山小学校５年生　児童２０名　引率２名
佐礼谷小学校５年生　児 童 ４ 名　引率３名

７　講　　師　アストロクラブ「トラペジウム」（天体観察）　河野利彦 氏　　田村 稔 氏
国立大洲青少年交流の家企画指導専門職
〔アドバイザー〕武蔵野市教育委員会教育部指導課　荒木俊夫 氏

8　日程及び活動内容

【10月11日（火）】　※テント泊

9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:30	17:00	19:00	20:30	22:00
学校発	入所式 オリエンテーション	グループワークゲーム	昼食	班会 テント設営	ビジュアルオリエンテーリング	つどい 夕食 自由	星空観察	入浴	就寝

入所式の後、グループワークゲームの時間を設定した。アイスブレイクで緊張をほぐしながら、ペア、グループ、全体と集団を増やし、身体接触のあるゲームも取り入れた。活動の合間にふりかえりを入れ、交流の家での生活で守ってほしいルールや友達とのかかわり方、集団生活の心構え等を考えさせた。昼食後は、テント泊に備えて班ごとにテントを設営した。交流の家の敷地内を活用したビジュアルオリエンテーリングも実施し、自然の中を散策しながら班の協調性を高めていった。夜は、自然環境館の屋上で星の専門家を招いて、木星の観察を行った。「初めて木星を観察した」という児童が多く、感嘆の声が上がっていた。

【10月12日（水）】

7:30	9:00	10:00	14:00	17:00	19:00	20:30	22:00
起床 つどい 清掃	朝食 班会 係会	班会 テント 干し	野外炊飯 （カレー作り） 昼食・後片付け	ウォークラリー （2.4kmコース） テント撤収	つどい 夕食 自由	班会 出し物 練習	入浴	就寝

２日目の午前中は、野外炊飯に取り組んだ。飯ごう炊飯は経験があったため、羽釜での炊飯に挑戦し、カレーを作った。どの班も手際よく調理を進め、おいしいカレーができあがった。午後からは、ウォークラリー（２．４ｋｍ）を実施した。５分間隔で班ごとに出発し、コマ図の情報を読み解きながら、約１時間の「フラワーパークめぐり」コースを楽しんだ。帰った班からテントを協力して撤収した後は、プログラムは入れず自由時間とした。明日のキャンプファイヤーに備え出し物を練習したり、外遊びを楽しんだりするなど、ゆったりと時間を確保できることも長期の魅力である。

【10月13日（木）】 ※ミニツーリングは3泊以上、宿泊する団体のモデルプログラム

7:30	9:00	12:00	13:00	16:00	18:50	21:00	22:00
起床 つどい 清掃	朝食 班会 係会	カヌー研修① 理科学習 「流れる水のはたらき」	弁当	カヌー研修② ミニツーリング （大洲城コース3km）	準備 つどい 夕食	キャンプファイヤー	入浴	就寝

早朝から小雨が降り続きカヌーの実施が危ぶまれたが、肱川に関する学習ＤＶＤの鑑賞やふれあい広場でのパドル練習で時間を調整し、河原へ着く頃には天候も回復した。まず、肱川カヌー場で乗り降りやセルフレスキュー、前進・後退、方向転換を練習した後、約３００ｍ上流にある観察・実験場所まで全員で漕いで上がった。カヌーを使った理科の学習では、川の内側と外側での流れの速さの違いや川底の深さを調べたり、実際に対岸へ漕いで渡り、間近で河岸の様子を観察したりした。お弁当を食べた後、大洲城を目指し約３ｋｍのツーリングに出発した。途中、いくつかの瀬張り（鮎を捕る仕掛け）を乗り越えながら、誰１人リタイヤすることなく、ゴールである大洲城へ到着することができた。大きな挑戦を乗り越えた子どもたちからは、達成感や充実感が漂っていた。お楽しみのキャンプファイヤーも班の出し物で盛り上がった。

【10月14日（金）】

7:30	9:00	12:00	13:00	14:30	15:00	16:00
起床 つどい 清掃	朝食 班会 点検	クライミングウォール エックス Xロープバトル	昼食	ふりかえり 作文 アンケート	退所式	出発	学校着

最終日、それぞれの部屋をきれいに片付け、最後の難関、８ｍのクライミングウォールに挑んだ。まず、４ｍの壁で練習した後、ハーネス（安全ベルト）を装着し、３つのコースへチャレンジしていった。周りの声援に後押しされ、半数以上の者が頂上まで到達することができた。次に会場を武道場に移し、今年度、開発したＸロープバトルという室内プログラムにも挑戦した。班対抗のバランスバトルを実施し、四日間で高めたチームワークを思う存分に発揮できた。レストランで最後の食事をすませ、作文を書くことで４日間の活動をふりかえり、事業を締めくくった。

10　参加者の声

参加者の事後アンケート結果

＊満足：83.0%　＊やや満足：17.0%　＊やや不満：0.0%　＊不満：0.0%

○　ビジュアルオリエンテーリングとキャンプファイヤーがとても楽しかったです。夜は木星が望遠鏡で見えました。

○　おかまなど１回も使ったことがなく、それで炊いたのでなおさらおいしかったです。家に帰っても自分の事は自分でするようにして、この経験を生かしたいです。

○　肱川の場所や川の流れによる「流す」「ためる」というはたらきを知りました。

○　３ｋｍをカヌーでこぎ、疲れたけど、一番楽しみにしていた　カヌーはすごく楽しく、またやりたいと思いました。

○　最後はみんなでゴールすることができました。仲間と協力する大切さ、自然の大切さを学びました。

○　班長としてみんなを引っ張ることができました。

○　クライミングでは中級コースに挑戦し、ねばって登りすごく達成感がありました。親に前とは違う自分を見せたいです。

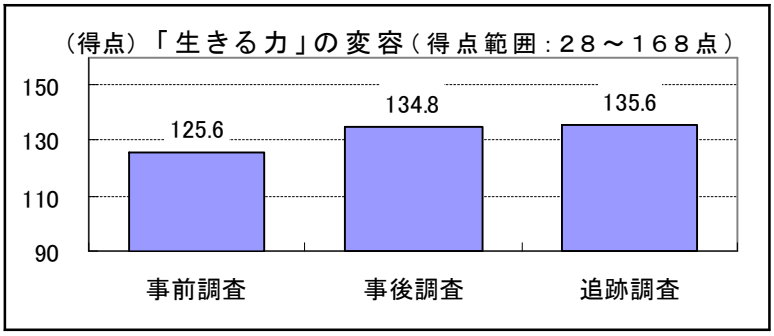
11　成果と課題

参加者の変容について、「生きる力」を測定する「ＩＫＲ評定用紙」の簡易版を用いて、入所前日（事前調査）、退所式前（事後調査）、活動１ヶ月後（追跡調査）の３回調査を行った。事前・事後・追跡の平均値を比較した結果、「生きる力」の全得点でその向上に有意差が見られた。この結果からも、青少年教育施設のプログラムを活用した体験や、日常の生活とは異なる環境の中で、長期の集団宿泊活動を体験することは、青少年の「生きる力」を育くむために大変有効であると考えられる。今後、１泊２日、２泊３日の学校も調査し、比較・検証していきたい。

さらに、大洲の地域資源である肱川と大洲青少年交流の家のメインプログラムであるカヌー研修を組み合わせた「カヌーで理科（流れる水のはたらき）」と大洲城までの３ｋｍツーリングの活動が確立できたことにより、理科や総合学習の授業としてカヌー研修を振り替えることが可能となった。授業時数を確保することは、長期自然体験活動の大きな課題であることから、今後も学習指導要領と関連付けながら、さらに教科として扱えるプログラムを開発していく必要がある。長期になることで精神面や体調面の管理、予算等で負担となる部分は増えるが、その分、本物の体験として残るものも大きい。今後も継続して事業を実施することで課題や問題点の検証を行い、小学校における長期自然体験活動の有効性をさらに深く追求し、愛媛県内の小学校長期自然体験活動の普及・推進につなげていきたい。

生きる力を測定する「ＩＫＲ評定用紙（簡易版）」

筑波大学の橘教授、信州大学の平野教授らが「生きる力」の変容を測定するために開発したアンケート用紙。「生きる力」を「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の３つの指標に分類し、２８項目に絞り込んだ質問を設け（例えば「いやなことはいやとはっきり言える」「人の心の痛みがわかる」など）、「とてもよくあてはまる（６点）」から「まったくあてはまらない（１点）」の６段階評価で回答を求める評定用紙。【事業評価に使える！「生きる力」の測定･分析ツール】参照



【資料１】

青少年教育施設プログラムを活用した小学校自然体験活動に関する普及・推進検討会議【議事録】

期　日　　平成２４年1月２０日（金）　１０：００～１２：００

会　場　　国立大洲青少年交流の家　所長室

参加者　伊予市立中山小学校長　吉田京子
伊予市立佐礼谷小学校長　一色明繁
大洲市立南久米小学校長　上甲　健
大洲市立平野小学校教頭　井上和義
西予市立多田小学校教頭　二宮隆三
大洲青少年交流の家所長　新山雄次
次長　國府修治
主任企画指導専門職　西河拓郎
武蔵野市教育委員会教育部指導課
教育アドバイザー　荒木俊夫

議　事

１．本事業の趣旨説明

２．青少年教育施設プログラムの活用と小学校自然体験活動の充実及び長期化に向けての展望

３．武蔵野市「セカンドスクール」の実践報告及び指導助言
武蔵野市教育委員会教育部指導課　教育アドバイザー　荒木俊夫 氏

４．その他、情報交換

会議記録

次長（國府）による司会・進行のもと、所長（新山）あいさつ、各自の自己紹介で会議がスタートした。まず、事業担当者である主任企画指導専門職（西河）が、機構のホームページ資料や中山連合小学校が実施した３泊４日のモデルプログラムの報告書をもとに、事業の趣旨説明を行った。

次に青少年教育施設プログラムであるカヌーを活用した理科学習やモデルプログラムを実施した５校が意見交換を行った。

【Ａ小学校】

昨年３月、学校から３１キロメートルのウォーキングをして宿泊し、植樹にも参加した。ここに来るだけでも非日常の活動になる。３１キロに挑戦しやり遂げたことで、中学校に進学しても、その効果が出ている。進学した中学校では、天候が悪いと、すぐに保護者が車で送迎する。雨の日は送迎の車で学校が混雑となることが大きな課題になっている。しかし、今年進学した子は、決して車に乗らず、自力で登校している。兄姉がいても一人自力で通学する。寒くても同じ。今年は３５キロのウォーキングに挑戦してこちらに来る。ソフトテニスの講習も予定。体験プログラムは、地域の学習をした上で利用した。地元にはまっすぐな

川しかなく、肱川のような蛇行がない。そうしたことを事前学習させていたので、より効果が上がった。
【Ｂ小学校】
　体験プログラムを利用したが、単元テストの結果、できる子できない子の変化はさほどなかった。理科、算数の時間が増加したが、学校行事にかかる時間はそのままであり、事業時数の確保が課題。以前は、ここに来て国語、算数を学習し、夜は夜間照明を点灯して自由に遊ばせた。その際のルールは一人にさせない、一人で活動しない。今回は近いのにバスで送迎してもらった。カヌーの運搬は重くて小学生には大変なので改善や工夫が必要。
【Ｃ小学校】
　学校で体験活動を進めている。田植え、稲刈り、芋作り、収穫祭など、高齢者との交流も多く、学校行事に振り回されている感じ。ここには４校連合で来るが、別の日に体験プログラムを利用することで２回目のカヌーができ、子どもたちにとって大きな喜びとなっている。
【Ｄ小学校】
　他の学校と連合で来るので、初めは、ここでの４日間に不安を抱く子が多い。５年生の理科の時間に充てられるのはよかった。４日間で子どもたちがたくましくなった。コミュニケーション能力も向上し、わがままを言わなくなった。比較的ゆったりしているので、先々の準備もできた。
【Ｅ小学校】
　２泊３日のプログラムを３泊４日にすると教員に伝えたところ、負担が大きいとの声があがった。今年度の児童は、落ち着いて行動することが苦手な学年だが、参加後、指示しなくても自ら行動できる力がついた。興味や面白さを感じたからだろう。体験プログラムは学習より、カヌーに興味が傾いた。非常勤の専科教員
（理科・図工を兼務）が参加できず、当日の学習の様子がうまく伝えられていないため、学習の接続性に課題が残った。４日目の作文では、普段はなかなか筆が進まない子が多いのに、紙が足りなくなるぐらい熱心に書いていた。ここでしかできない体験をすべき。カヌーの重たさは、西河主任が事前にきちんと指導してくれ、むしろ覚悟ができていた。運び終わった児童が困っている女子の手伝いをするなど、協力性を高めることもねらえる。瀬ばり（鮎採りの仕掛け棚）が多かったのは難点。瀬ばりという大洲独特の暮らし（伝統文化）を知る意味は大きいが、５か所は多すぎた。

　続いて武蔵野市教育委員会教育部指導課教育アドバイザー荒木俊夫先生より、武蔵野市が実践しているセカンドスクールの紹介や指導助言があった。
　＜武蔵野市のセカンドスクールの概要＞
・平成４年より１２泊１３日を小中学校から公募し、夏休みに試行
・平成７年より全小学校でセカンドスクール実施（３泊程度）、中学校も試行
・平成８年より全中学校が実施（３泊程度）
・民泊での共同生活や農業体験による高い教育効果が認められ、小学校では多くの学校が７泊８日を、中学校ではすべての学校が、４泊５日を実施
　※４年生は２泊３日のプレセカンドスクールを実施
　＜指導助言＞
【教員の負担を減らすことについて】
　教員は１９時までの勤務とし、それ以降は、基本、自由にしてよい。１９時以降は、学生、

教員志望者、地域の方などの補助指導者が受けもつこととし、緊急な場合だけ対応する。補助指導者は、必ず各部屋１人つける。

小さい子どもを抱える女性教員は、なるべく担当学年にしない。もしくは期間中、交代制にする。担任以外の教員も長く学校を離れる場合、臨時の教員を配置したり、時間割の変更したりする。等

【反対する保護者への対応について】

習い事への対応として、現地にピアノなどを用意したり、塾のドリルも持ってきたりしてよいことにする。基本はそこでしかできないことをさせる。この事業の最大の効果は、コミュニケーション能力の向上で、何より親と会話するようになる。結果、学力も高くなり、武蔵野市は全国１位の秋田県より高い。

【長期宿泊体験のよさについて】

子どもたちのアンケートで見る事業のよさは、「友達と一緒に生活できた」「体験活動ができた」「家から離れることができた」など。また泊数を多くして長期化することで、プログラム全体に余裕ができる。基本は、午前・午後に１つずつのプログラム、夜にプログラムは入れない。２泊だとこのようなゆとりがでない。

最後に荒木先生の学校がテレビ取材を受けたときのＤＶＤ視聴し、道徳教育と体験活動の関連資料や、学校行事、体験学習の進め方の資料について補足説明があった。

その他、最後の情報交換では、先生方から「子どもたちにここでしかできないことをさせたい」「時間数確保が課題なので効果のある体験活動をさせたい」「子どもたちがしたいことをさせてもよいのではないか」「事業時数よりも内容の進度が課題になる場合もあるので進度を進めることも検討する」「施設の特徴を生かしたダイナミックな体験活動がよい」「ここでの体験活動は事業時数を節約できるメリットもある（「ストーンアート」を導入し、図工として扱う）」「大きい予算措置が必要だ」「宿泊の場合、子どもの管理の問題は大きい」など、様々な視点から貴重な意見が出た。

おわりに…

普及・推進検討会議は、実施したモデルプログラムや先進校の取り組みをもとにした活発な意見交換の場となり、小学校における自然体験活動の充実や長期化に向けての手がかりをつかむことができた。報告書を作成し、県内、近隣県の小学校関係者へ広報できたことも大きな成果と考える。

【資料２】

国立大洲青少年交流の家体験プログラム（カヌー）を活用した

「生きた学び」のある体験学習にチャレンジ！！

1 実施時期　9月～11月上旬（単元の配置や気温・水温を考慮）

2 単元名　第5学年　理科　「流れる水のはたらき」

3 単元目標　流水の様子や流水による地面の変化を、河川の様子、流速や水量、自然災害などと関連付けながら調べ、見いだした課題を実体験による学習や写真・映像等の資料に基づいて探求していく活動を通して、流水の働きの規則性についての見方や考え方を育てる。

4 単元の構成
第1次：4時　地面を流れる水のはたらきを調べよう（自校での学習）
第2次：5時　川の水のはたらきを調べよう（交流の家での学習）
第3次：3時　川の流れと土地の変化を調べよう（自校での学習）

5 交流の家で学ぶ意義

「生きた学び」のある体験学習とは…

「生きた学び」とは、自然や人とのかかわりという本物の体験活動の中から児童自らが課題を見付け、主体的に判断しながら、よりよく課題を解決し、日常生活に生かしていこうという学びである。

この「生きた学び」を充実させるためには、学習課程における児童の学習意欲の持続が不可欠となる。学習意欲の持続とは、児童が「自ら学びたい」「学ぶことが楽しい」という思いをもちながら、見通しをもって主体的に学習に取り組むことであり、学習過程おいて児童自身が解決したいと思うような課題を設定することが重要である。

そこで…

広大な肱川の流れの中で常時行われている交流の家の体験プログラム（カヌー）と本単元の現地観察・実験を結び付けることで、実際に川へ出かけ、カヌーに乗って観察ポイント（蛇行した中流域）へ移動し、河原や川岸の石を手にとって観察したり、流れの速さや水量を肌で感じたりできる「生きた学び」のある体験学習を展開することが可能となる。このダイナミックな体験学習は、児童の理科学習への興味・関心、学習意欲を高めるだけでなく、より確実な学習内容の理解や定着、さらには、体験活動が不足している児童への貴重な自然体験やクラスの思い出づくりにもつながるはずである。

6 準備物　教科書、学習ノート（交流の家で準備）、筆記用具、探検バック、タオル、濡れてもよい服装、サンダル（かかとのあるもの）、帽子、着替え（濡れた場合を想定して）、水筒
※眼鏡の方は眼鏡バンド

7 本時の目標　第2次　川の水のはたらきを調べよう
肱川の現地観察に出かけ、カヌーを活用して水の流れ方や河原・川岸の様子等について調べ、流れる水の働きによって、川は周りの様子を変化させることを実体験として捉えることができる。

8 学習の流れ（第2次：5時）

時間	活動内容	備考
9:00	学習「肱川について知る」　場所：視聴覚室 ・カヌーができる装備、筆記用具、その他学校で指示された物、ライフジャケットを持って集合	ビデオ視聴約20分 学習ノートを配布
9:45	体験「カヌーに乗ってみよう!!」　場所：肱川カヌー場 ・交流の家バスで移動 ・艇庫前でパドル練習→パドルとカヌーを運び出し練習	学習ノートをビニル袋に入れて持参 ※2人組で2往復するか両手で運搬
11:00	学習「カヌーで観察・実験」　場所：うかいレストプラザ前河原 ・カヌーに乗ってうかいレストプラザまで移動（トイレ休憩） ・鵜の飼育小屋で説明を聞いた後、河原や川の流れの観察と実験	トイレ：うかいレストプラザ
12:30	「河原でランチタイム」　場所：うかいレストプラザ前河原 ・みんなで仲良くお弁当タイム ・食べ終わったら自由時間、石探し、石立、水切りなどをして遊ぶ	水切りは離れた場所で安全を確認（所員） ※トイレの声かけ
13:30	体験「カヌーツーリングに出かけよう!!」　※川の観察含む コース：うかいプラザ～大洲城（約3km） ※如法寺河原にトイレ有り	伴走車と無線連絡 ※先導（所員）、班の間に引率、最後尾（所員）
15:00	学習「ツーリングをふりかえろう」　場所：大洲城前河原 ・班の代表者が感想発表 ・ぞうきんがけ、水抜きをして橋の下までカヌーとパドルを運搬	記念写真 伴走車　※ぞうきんを運ぶ トイレ：集会所
15:30	・肱川橋の冨士山側の道路へ移動、交流の家バスで帰所 ・着替えて休憩、洗濯など	※トイレの声かけ

9 ツーリングマップ

10 連絡先　国立大洲青少年交流の家　企画指導専門職　TEL 0893-24-5176